

教員名	安田 次郎 (YASUDA Tsuguo)
所 属	文教育学部人文科学科比較歴史学講座
学 位	博士 (文学) (2002 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.li.ocha.ac.jp/hum/history/teacher/yasuda/index.html/ yasu5178@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

中世社会 / 寺社 / 荘園

◆主要業績

・『福智院家文書 第一』(続群書類従完成会) (上島享・末柄豊・前川祐一郎の3氏と共同校訂)

◆研究内容

1 興福寺旧蔵史料の研究。とくに「福智院家文書」の解読と研究、そしてそれを史料集として公刊するための調査・研究を進めた。興福寺や春日社の組織や所領支配のありかたの研究、文書様式についての調査があらためて必要であった。

2 南北朝期についての研究。南北朝の動乱は、日本の中世を前後にわかつ大きな画期である。この期間について、従来のような政治史的観点からではなく、社会史的な観点からどのような歴史叙述が可能かについて考えた。

3 いくつか具体的なモノについて研究した。たとえば、興福寺の国宝・仏頭。いわゆる鎌倉復興期に興福寺の東金堂衆が飛鳥の山田寺から奪ってきたとされる白鳳仏で、のちに火災に遭って行方不明となり、大正期になって頭部だけが再発見されたというドラマチックな経歴をもつものであるが、この仏頭をめぐるいくつかの謎の解明を試みた。これは寺院間紛争、その解決方法にかかわる研究である。

初期の宝篋印塔について研究した。南都の鎌倉復興に従事した石工たちは中国から渡ってきた技術者であるが、山城、大和に残存する鎌倉時代の宝篋印塔は彼らの手になるものだろうという観点から考えてみた。技術の伝来と定着に関する研究である。

◆教育内容

1 入学したばかりの学生を対象として、史料読解や解釈の具体的な方法について、基本的な手ほどきを行った。あわせて、生の史料からどのようにしてある特定の歴史像が構成されてくるのかを講じた。学生の疑問をすくい上げ、また各自の意見を積極的に発表させることに留意した。

2 南北朝期に関する重要な先行研究を紹介してその問題点について講じた。聴講学生の多くは卒業論文作成をひかえているので、学術論文がどのように構想されて書き上げられてくるのかについても言及した。

3 中世の僧侶の記録を取り上げて精読し、具体的な個々の記事をどう解釈して歴史叙述にまでつなげていくかについて、実戦的な演習を行った。ここで参加者が行った作業は、各自の学力養成につながり、また卒業論文作成のための貴重な経験となる。

4 大学院では『大乘院寺社雑事記』紙背文書の研究を行った。きわめて難解な史料であるが、読解をめざして行われる様々な努力や工夫のなかから研究の手がかりが発見されている。

5 卒業論文、修士論文執筆者に個別的に指導を行った。博士論文作成中の院生にも適宜アドバイスした。

◆将来の研究計画・研究の展望

興福寺旧蔵史料の紹介、活字化が進めば、武家・公家を中心に構成されてきた日本の中世史像が大きく変わる可能性がある。寺社の側からみた歴史という視点に立てば、比叡山の史料が乏しいだけに、南都の史料はきわめて貴重である。引き続き重要史料の収集と分析を行っていきたい。そのような基礎作業を通じて、中世社会における寺社の位置がいつそう明らかになり、中世社会像はよりバランスがとれて具体的なものとなるだろう。とくに史料上になかなか残りにくい庶民の歴史について、より多くの手がかりが発見されて歴史叙述に生かされていくことが期待される。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・中世社会史研究
- ・古文書学
- ・古記録学

◆受験生等へのメッセージ

古代には律令制、近世には幕藩制とよばれる体制の枠組みがある。中世にも学界では権門体制という概念があるが、古代や近世にくらべれば、中世は国家や社会の枠組みはぼんやりとしてよくわからない、というのが一般に持たれている印象であろう。「だから中世はいやだ」というひとと、「だから中世は面白い」というひとがいる。もちろん、私は後者だから中世を勉強している。枠組みがないだけに、どこからでも入りやすい。史料のなかから自分で自由に歴史を再構成してみたいと思っているひとは中世向き。

史料を集めてそれを読み、並べ直してみたり、記載事項をデータ化して集計・分析したり、あるいは書かれていることのウソを暴いてみたりすることが好きな人、歴史に向いているかもしれません。